

ささゆり



Duo-Yamanka

ささゆり

山中與隆

目次

ささゆり

1

編者あとがき

115

ささゆり

作 山中與隆

僕はある女性のことをささゆりと呼ぶことにした。
実に良い響きではないか。

ささゆりは一階の総務部にいる。僕は五階の営業
技術部である。僕はこの会社でささゆりを一目見た

ときから、この世のものとは思えないほど美しい女性だと思っている。

僕は、これまでに三度だけ彼女との接点といえるものがあつた。

一度目は、僕が出先から帰社するため、地下鉄入り口の階段を上がって歩道に出たら、用足しの帰りらしいささゆりと鉢合わせしたときである。十一月の快晴の午後で、彼女は僕と並んで歩きながら、右

手で陽を遮りながら、

「暑いですね」

と言った。

「十一月でも天気がいいと陽差しが強いですね」

と僕は言った。さらに僕は同僚の男性から聞いた彼女の名前を確かめたくて、

「佐々木康子さんとおっしゃるのですよね」

と聞いた。彼女は、

「はい、そうです」と答えた。

会社に着くまでずっと肩を並べて歩いたが、交わした会話はそれだけだった。

しかしその日の快晴の青空と、さんさんと光注ぐ太陽とともに僕にとっては忘れられない出来事だった。そのとき僕が彼女の名前を聞いたのに、彼女は僕の名前を聞かなかったことを不満には思わなかった。

た。というより、僕は彼女の名前を確認できただけで満足だった。僕にとってささゆりは高嶺の花のよ
うな存在だったのだ。

二度目の接点は、ユーザーを大勢集めた商品説明会をするための準備をしているときだった。そのための資料を作成するのに、原稿を作った我々は総務部のある課と共同で作業をした。たまたま僕はささゆりと並んで作業することになった。僕は、資料を

揃えて彼女に渡し、彼女はそれを袋に入れるだけの単純な作業を受け持った。それは三十分足らずで終わったが、僕にとつてはいつまでも続いて欲しいような幸せな時間だった。その三十分の間、僕とささゆりは一言も喋らなかつた。作業を終えたときに僕が

「これでおわりです」と言つたら、彼女が

「ありがとうございます」

と返事したのがこのときの会話のすべてだった。

この日も、先日の地下鉄駅から会社まで肩を並べて歩いた日と共に、僕にとっては忘れられない一日となった。

三度目は忘年会だった。本社には社員が八百人以上いるので、忘年会は課ごとにやっていたが、ときどき誰かの思いつきでほかの課と合同ですることが

あつた。その年は先の資料作成作業が縁で、僕の課は総務部のささゆりのいる課と合同ですることになった。言い出したのは僕ではない。僕はそんなことを提案するほど課の中での存在が大きくない。だがこの企画は、僕にとっては願つても無いものだったことは言うまでも無い。

忘年会は会社に近い居酒屋で行なわれた。メンバーは二十人足らずだったが、このとき僕は意識して

ささゆりの隣の席に座った。彼女は同じ課の女性と並んでいたが、机を挟んで向かい側には僕と同じ課の男性が三人いた。

二つの課の課長が挨拶した以外、僕達はもっぱら同じテーブルの六人で話しをした。ある若い男は彼女に向かつてぬけぬけと、

「僕はあなたのファンです」
と言った。そう言われた彼女は、

「ええっ？」

と言つて笑つただけで、特にそれに対するコメントはしなかつた。僕にもその男と同じことを言いたい気持ちにはあつたが、僕はそういうことをサラツと言える性格ではなかつた。だが同じ思いの男がいて当然だと思つた。もしかしたらささゆりを見たことがある男はみんな彼女のファンではないかと思つたくらいである。

合同の一次会は二時間あまりでお開きとなり、後は思い思いの者達で二次会に行くことになった。一次会での二時間の間、僕はあまり喋らなかつた。ほとんどはみんなのおしゃべりの聞き役だつた。彼女もあまりしゃべる方ではなく、終始ニコニコしながら相槌を打っていたような気がする。そんな調子だつたので、僕と彼女が直接話すこともあまり無かつた。しかし僕は彼女に、家は遠いのかと聞いた。彼

女は、桑名に住んでいるので近鉄と地下鉄を乗り継いで一時間くらいかけて通勤していると言った。

これは、僕に対して言ったことではないがささゆりは、自分には四歳になる子供がいると言った。僕は、ささゆりは独身だと思ひ込んでいたが、彼女は、お母さんだったのだ。

二次会はいくつかのグループに分かれた。おおかたそれぞれの課の者同士になったようだった。ささ

ゆりも彼女の課でまとまって何処かに流れていった。僕も自分の課の何人かと別の居酒屋に行つた。

忘年会以降、ささゆりとの接点がないまま約半年後に僕は、東京支店に転勤になつた。わが社の大ユ―ザーの一つである鉄道会社の関東以北の仕事を担当することになつていた僕は、転勤前から東北地方への出張が多く、東京支店の中にデスクを一つ与え

られていたくらいであった。

だから転勤といっても、そのときすでに東京支店には一緒に仕事をする仲間もいて、仕事の上では新しいところに行くという感覚はなかった。通勤圏内のさいたま市に会社の寮があり、僕はそこに入った。名古屋の本社時代は自宅から通っていた僕にとって、仕事よりも私生活の変化の方が大きかった。僕は入社前の約三年間大きな病気で入院生活をしてい

た。退院後もしばらく家でぶらぶらしていた。そんな僕を父が、社長が知り合いというこの会社にコネで押し込んだのだった。

僕は、病気前のことを何も覚えていない。だから、何時どのようなことで病気になったのかも知らない。何故か家族もそのあたりのことは話してくれたことがないのだ。

いずれにしても僕の初めての一人暮らしは我が家

にとつても大きな出来事だった。

僕は三人兄弟の真ん中で、四つ年上の姉はすでに嫁いでいて岐阜に住んでいる。また六つ年下の弟はまだ名古屋の私立大学に在学中だった。そのとき僕はもう二十七だったが、初めて家を出るといっているので、母は何から何まで僕の一人暮らしの準備を手伝ってくれた。

母は、さいたまの寮に何度も足を運んで、生活に

必要な物を整えてくれた。だから転勤の前後も東北方面に出張が続いていた僕よりも、母の方が寮で生活している同僚たちと親しくなつたくらいである。

僕が次にささゆりに出会つたのは、転勤になつてから十年近くも経つてからだつた。

その年僕は、ゴールデンウィークに名古屋に帰省した。休みの最後の日に、たまたま三重県津市の美

術館で開かれていたモネやルノワールなど印象派の絵の展覧会に行った。僕はモネの風景画が好きなのだが実物を見るのは初めてだった。豪華な美術書の写真や高価な複製でも味わったことの無い感銘を受けた。

展覧会を一回りした後、美術館の洒落たレストラ
ンで遅い昼食をしようとしていたときである。女性
の二人連れが入ってきて少し離れた窓際の席に着い

た。彼女達がメニューを見ながら注文する声がしたので何気なくそちらを見た僕はハツとして、急に動悸が打ち出した。二人の中の一人は間違いなく忘れもしないささゆりだったのだ。

ささゆりもすぐに僕に気が付いた。彼女は笑顔で僕に会釈した。僕は、まだ頼んだものがきていなかっただので、彼女の席の傍に行つて挨拶した。ささゆりは、連れ若い女性を、娘の望だと言つて僕に紹

介した。ささゆりは十年前と少しも変っていないが、望という娘も母親に負けないくらい綺麗だった。そのときささゆりは思いがけなくも、

「お一人でしたら、ご一緒に如何ですか？」
と言ったのだ。僕は望に構わないか聞いてから席を移した。

「随分久しぶりですね。お変わりありませんでしたか？」

「ええ、私は以前のままです。藤田さんはいまも東京支店ですか？あちらは如何ですか？」

ささゆりは僕の名前を知っていた。しかも転勤してから一度も会っていないのにちゃんと覚えていたのだ。

「以前、四歳になるお子さんがいるとおっしゃった方ですか？」

「そうです。もうこんなに大きくなりました」

望という娘の話題の後、

「印象派の絵がお好きなのですか？」

「印象派が、というわけではないのですけどこの美術館が好きで時々来るのです。でも初めて本物を見たルノワールの『湯浴みする女』は感激しました。写真などではよく見る絵ですが、本物の雰囲気はこれまで見ていたものとはまったく違って、しばらくその場から離れられないくらいでしたわ」

そばで黙ってケーキを食べていた望が、

「お母さん、私が一回りしてきてもまだあの絵の前にいたものね」と口を挟んだ。

「たしかにあれは素晴らしかったですね。僕もしばらく立ち止まって見ていましたよ。でも展示室で出会わなかったですね」

「私たち、常設展示室も見て来ましたから」

こうして母子が並んでいると、年齢の差もそれなりにわかる。しかしさささゆりは、若々しく美しいので、遠くからだと友達同士か姉妹のように見える。

彼女は突然こんな話を始めた。

「藤田さん、時には本社の会議などに来られることあるでしょ。そんなときにお時間があつたら、ちよつと声を掛けてくださるといいのに」

僕にとっては、願つても無い嬉しい申し出だった。

しかもそれだけでなくささゆりは、

「もしご迷惑でなかったら、メールアドレスか何か教えていただけませんか？」

と言うではないか。

彼女が手帳を見ながら読み上げるアドレスを、僕が手帳に書き取っているのを隣で見っていた望が、独り言のように

「おかあさんのことささゆりって言うんだ」

と小さな声で言った。僕が彼女のアドレスを書くところ、に表題として『ささゆりアドレス』と書いたのを目聡く見たのだった。望の独り言が聞こえたのか聞こえなかつたのか、当のささゆりは、一瞬アドレスを読み上げるのを中断して僕の顔を見たが、何も言わずにアドレスを続けた。

美術館での偶然の出会いは、思いがけない発展の予感を含んでいた。

美術館を出た後、もう少し津市内をぶらつくとい
うささゆり母子と別れて、僕はそのまま自分の車で
東京に向かった。

僕は心に暖かい思い出を抱きながら、仕事を続け
た。ささゆりからメールが来ることはなく、僕も特
に用が無いので書かなかった。

ささゆりからメールがあったのは、半年くらいし

たときだった。

『ご無沙汰しております。その後お変わりありませんか。今年のお正月は名古屋に帰省されるのですか。もしお帰りになるのであれば、一度お会いしませんか？』というものだった。

心の底に願望はあっても現実には、ささゆりとはデートを誘い合うような間柄でもなかつたので、これは僕にとって意外な提案だった。

仕事納めの後すぐに帰省することにしていた僕は、『メールありがとうございます。名古屋には暮れの二十九日から四日までいる予定です。その間でよかつたら、是非お会いしたいと思います』と返事した。折り返し返事が来た。

『お会いできるとのこと、楽しみです。それで、お帰り早々になります。二十九日か三十日に私のところで食事というのはご迷惑でしょうか。娘と一緒に

に手料理を作ってお待ちしますが』

『お言葉に甘えて、二十九日の夕方にお邪魔するとういことでもよろしいでしょうか？』

ささゆりの住所がメールで送られてきた。

僕は彼女のところを持っていく土産を考えた。どんな物がいいのか見当がつかない。できれば東京にいる間に準備したい。考えあぐねて、何か持って行きたいがどんな物が良いかメールで聞いた。ささゆ

りは、来てくれるだけで嬉しいから手ぶらでいいと書いた後で『どうしても何かと思われるのでしたら、ジャンルは何でもいいので、藤田さんがいま一番お勧めのCDを一枚お願いします』とあった。言われれば言われたで、これも悩ましい注文であったが、僕は毎日楽しみながら選曲をあれこれ考えた。どうしても自分の好みよりも、彼女の好みを考えてしま

いざ行くときになると、何を着て行くかまるで女性が無処かに出かけるときのように迷ってしまった。といっても普段着るものなどにはまったく拘っていなかった僕は、迷ったところでいろいろ持っているわけでもない。結局仕事で着ている紺のスーツにした。

東京で買っておいだCDと箱のデザインで選んだ

ベルギーのチョコレートを持って、ささゆりの家に向かった。ささゆりの住まいは名古屋から西に近鉄で三十分くらいの桑名である。

みやげのCDは『新世界交響曲』にしたが、贈りたかったのは余白に入っている『オセロ』という演奏会用序曲の方だった。劇的な音楽だがオーケストラの弦の響きが非常に美しい曲だ。僕は、その美しさをささゆりの美しさに重ねていた。

電車に乗っていても非常に緊張しているのが自分にもわかった。仕事で大事なユーザーのところに行くときも緊張するが、この日ほどではないと思ったくらいである。ささゆりと望がどのように僕を迎えてくれるのかいろいろ想像した。桑名駅からささゆりの家までの道も、気持ち落ち着く間もなく着いてしまった。

ささゆりの住まいは、国道一号線から少し海側に

入ったところにあるごく普通のマンションだった。エレベーターもあったが、僕は階段で三階まで上がった。

玄関の扉を開けたのは望だった。遅れて奥からエプロンをかいたささゆりが小走りに出てきた。こんな姿のささゆりは初めてである。これまで以上に美しく見えた。部屋の中からは夕食の匂いが流れてきた。三DKのこじんまりした部屋で、中は綺麗に整

理されている。ただ、リビングに通されてもささゆりの夫の姿は無く、それだけでなくささゆりの母子以外に同居人がいる気配が感じられない。僕は、おそるおそる聞いた。

「ご主人はお留守ですか？」
意外な返事が返ってきた。

「主人はいません。私たち二人だけです。何も説明しなくてすみませんでした。私たち母子家庭なんで

す。実は私、結婚はしていませんの。学生時代に結婚すべきだと思った人はいたのですが、別れ別れになつてしまいました。大学二年のときこの子が生まれたのです。残りの学生生活と就職してからは、この子を実家で見てもらいながらでした。望が中学になつてから実家を出てここに越してきたのです。実家も桑名で、この近くです。

でも今日は、結婚相手を探す目的で藤田さんをお

招きしたのではありませんからご安心ください。そのことではなくて、ぜひ藤田さんにお聞きしたいことがあつたのです。でもそれは食事の後にしませんか？」

ささゆりからの食事の招待は、それまでの付き合い方からすると唐突な感じはあつた。僕は、ずっと彼女に憧れていたが、ささゆりも同じ理由で僕に近づきたいと思つているなどと大それたことは考えら

れなかつた。

やはり何かそれ以外の理由があつたのだ。

『結婚したい人』ではなく、『結婚すべき人』と言つたのも意味ありげである。

二人が腕によりをかけて準備したという美味しく心のこもつた食事がすむと、食器が下げられ、キッチンからコーヒーのいい香りが漂つてきた。

三人はテーブルでコーヒーを前にして向き合つた。

ささゆりが一枚の写真を僕の前に差し出した。ひどくピントのボケた写真で、一人の人物が椅子に座つた姿勢で何かを構えているらしいが、顔は勿論何をしているところかも知ずぐにはわからない。広い範囲を写した写真のある人物のところだけを無理やり拡大してコピーしたらしい。

「拡大しすぎて何が何やらわからなくなっています
が、これより小さいと、それも誰が写っているのか

わからなかつたので」

ささゆりは弁解しながら、

「ここに写っている人のことを藤田さん、ご存じないかと思ひまして。会社のある知り合いが、『もしかしたら藤田君が知っているかもしれない』と言われたもので」

僕はその写真をまじまじと見た。しかし顔の輪郭はあまりにもぼんやりしていてとても人相の判別は

出来ない。着ている物の色さえはつきりしない。しかし写真の人物が構えているのはチェロであることはわかった。

「これ、オーケストラの写真の一部ですかね？」

「そうです。その人大学のオーケストラでチェロを弾いていらっしやったのです」

「何処の大学ですか？」

「名邦です」

名邦大学というのが名古屋にあることは知っているが、僕には関係ないと思った。

「どうしてこの写真の人物のことを聞かれるのですか？」

このとき望が横から口を挟んだ。

「母は、この人が私のお父さんじゃないかと言い出したんです。藤田さんも名邦大学なのですよね」

僕は、ハツとした。僕には大学時代の記憶が抜け

落ちている。しかし、ささゆりのその知り合いという人が、僕も名邦大学だと言ったのならそうなのかもしれない。ということは、ささゆりも同じ大学だったことになる。

「そうらしいですね」

「そうらしいってどういうことですか？」

ささゆりが驚いたように言った。

「何故か、大学時代前後の記憶がないのです。僕、

入社前に長いこと病気で入院していたのですが、どうもそれが関係あるらしいのです」

「そうでしたか」

ささゆりはあらためて僕の顔を眺めてから、

「実はその大学時代にメチャクチャなコンパがあつて、そのとき三次会の後ある人とホテルに行つてしまつたのです。そのときに出来たのがこの子なのです」

「母は、聖女みたいな顔して結構不良だったらしいのね」

「聖女なんかじゃないわよ」

親子にしては、ざつくばらんな会話である。

「そのときの相手がこの写真の人だと思われるんですね？」

「『思う』じゃないくて、その人なんです。でも私はオーストラリアとは関係なかったの、その後妊娠がわ

かつて私、相手の人を探しました。でもオーケストラは解散していて、誰に聞いてもこの人が何処でどうしているかもわからなくなってしまったのです」

「僕もそのオーケストラに入っていたのなら、この写真からでも類推できたかもしれないけど、これだけじゃわからないですね。これの元の写真は無いのですか？」

「あります。でもそれもわからないと思いますよ」

ささゆりはリビングの戸棚からすぐにその写真というのを持ってきた。練習中のオーケストラのかなり広い範囲が写っているが、普通のサービスサイズでしかも、ピントも合っていない。確かにささゆりが言うように、その人物の顔などまるで判別できなかつた。しかしチェロ奏者が八人くらい並んで弾いている様子はわかった。かなり大人数のオーケストラらしい。

「藤田さんはこのオーケストラに入っていたのじゃないのですか？」

「それがわからないのです。うちに楽器なんか無いと思いますし、違うんじゃないですか」

結局この日、ささゆりが聞きたかったことには何も答えられなかった。

僕は家に帰ってから、母親に聞いた。

「僕は名邦大学を出たの？」

「どうして急にそんなこと聞くの？ 今日あちらでそんな話が出たの」

「それに、僕がオーケストラに入っていたかとか聞かれた」

「そうだったの？ でもその頃のこと知らないほうがいいと思うわよ。あなたにとっていい話じゃないから」

母はそう言ってから、しばらく考えていたが、

「でももう今はすっかり快復しているのだし、自分のことを知っておく必要があるかもしれないわね」
そう言っただけで母は話し始めた。

「そうよ、名邦だったの。でも重い病気になって卒業はしていないわ。お父さんのお友達があなたの会社の社長さんだったの。で、事情をわかってくれて採用してくれたの。でも優秀な社員だからありがたい

と言ってくれているから問題ないのよ」

「父さんのコネで入ったのは知っている。それより重病って何だったの？」

「頭を大怪我して、外傷だけでなくそのころの記憶を失ってしまったの。結局それは戻らなかつたけど、通常の生活はまったく支障なくなつたので、就職も出来たのよ」

「大怪我って？」

「それは、私も思い出したくないから、またときが来たら話すね。あなたもあまり考えないようにした方がいいわ」

僕は、ささゆりに食事の礼をメールして、会社の名邦出の知り合いという人の名前を聞いた。出来れば電話番号も知りたいと付け加えた。

ささゆりからは直ぐに返事が来て、その人物の名

前と電話番号がわかった。

川北という経理部長だった。僕は直ぐに電話してみた。電話には川北本人が出た。僕はささゆりから聞いたことで、話が聞きたいと言うと、今日なら暇だから自宅に来てくれたら知っていることは話してもいいと言う。僕は電話を切ると直ぐに川北部長を訪ねた。

僕は、立派な床の間のある広い部屋に通された。

もう大掃除もすんでいるのだから、部屋は清々しい空気に包まれていた。すぐに奥さんが茶を運んできた。僕が

「会社で大変お世話になっていきます」と挨拶すると、

「藤田君は、わが社の技術部門のホープなんだよ。いま東京支店だけど社長も大いに期待している。実家が名古屋で、いま休みで帰っているんだよな？」

と僕に相槌を求めながら、奥さんに説明した。

違う部署なのに僕のことなどをどうして知っているのだろうか。社長と親しいのだろうか。それとも社長がコネで入った僕を、ことさらに立ててくれているので幹部の人たちは知っているのだろうか。

「ところで佐々木君に聞いた話というのはどんなことと？」

「部長は名邦大学のオーケストラのことをご存知な

のですか？」

「ああ、あの話ね。佐々木君が会社で私の部屋に来て、ボケたような写真に写っているある人を知らな
いかって言うんだ。私も名邦だが彼女の世代とはだ
いぶ離れているからね。それにオーケストラは私の
時代からあったが、私は関係なかった。たしかチェ
ロの前から二人目に座っている人を知らないかって
言っていたけどね」

部長は、しばらく間を置いてから、

「ただオーケストラに関して、ずっと後のことだが新聞で報じられた事件があつたのは覚えているよ」

「事件ですか」

「そう。なんでもオーケストラのメンバー同士の喧嘩で、一人が瀕死の重傷を負い、怪我をさせたもう一人も自殺未遂とかだったかな。でも、それが彼女

の持ってきた写真と関係あるかどうか私にはわからんけどね」

「部長は、誰かそのオーケストラに入っているお知り合いはいなかったですか？」

「そうだな。一人いるけど、いまどうしているかな。」

それよりインターネットか何かでその事件のことを調べたら、関係者のことが出ているかもしれないよ」

「そうですね。事件が部長よりもかなり後の世代の

ことだつたら、佐々木さんが少しは知っているかもしれないですね」

「でも佐々木君はその事件のことは何も言っていないから、それとは関係ないかもしれないよ。たまたま私がいま名邦のことで思い出したただだから」

川北部長は僕が名邦出身であることには何ひとつ触れなかった。もしかしたら、僕が記憶をなくして

いることを知っているのかもしれないと思つた。

僕は早速インターネットで名邦大学事件を検索してみた。部長が言うとおりちやんと出ていた。それによると、大学のオーケストラの部員同士が喧嘩になり、団員Aが持っていた楽器で団員Bの頭部を殴打、Bは意識不明の重傷を負う。Aは頭から血を流して倒れたBを見て、死亡させたと思い、自分の楽器を床に叩きつけて壊し、直後に大学の屋上から投

身自殺を計るが命は取り留める。喧嘩の原因は、周
囲の者の証言によると些細なことらしく、Aがどう
してあんなに激昂したのかわからないと言っている。
警察は意識を失って入院中のAの快復を待つて取り
調べることにしている。また、この事件のために大
学側はオーケストラの活動を当分休止させる処置を
取った、という記事であつた。

インターネットの記事は、当事者達が大学一年生

で未成年であつたために実名でなかつたし顔写真なども載っていなかった。事件が起きたのは、逆算してみると僕が名邦に入学した年になる。

大学時代のことを話そうとしない母だったが、僕は母にしつこく聞きただした。母は心を決めて話してくれた。

「あなたは中学、高校と成長するに従つて、気性の激しい子になつていったの。しよつちゆう友達と殴

り合いの喧嘩をして先生が何度も家に相談に来られたの覚えているでしょ。怪我をさせられたって言うつて、相手の子の母親が怒鳴りこんできたこともあったわ」

初めてきく話である。

「ところが、退院してからは嘘のように穏やかな性格になって、しかも真剣に仕事の勉強もするようになったので、初め心配していた社長さんも安心して、

いまでは『わが社のホープ』とまで言ってくださるようになつたの。私たち家族も、喧嘩の絶えないあなたには苦勞させられたけど、本当に安心できるよ
うになつてホツとしてゐるわ」

ここまで聞いたとき、事件の喧嘩と僕がもしかしたら関係あるのではないかと感じ始めた。母は続けた。

「それでも名邦に入る程度の勉強はしていたので何

とか入学して、中学から始めていたチェロを生かすと言つてオーケストラ部に入ったの。オーケストラに入つて直ぐの夏の強化練習中に、一年上の人と喧嘩になつて、カツとなつてチェロでその人の頭を殴つてしまつたらしいの。それが原因でその人は重傷を負い、それだけでなく、あなたは学校の屋上から身を投げたの。意識不明の重態でお医者さんも駄目かもしれないとおつしやつたけど、幸いに命は取り

留めたの。だけど記憶喪失が残った。いまあなたの頭の中にあるのは、その後私たちが話して聞かせたことと、あなた自身が努力して身につけたことなですよ」

僕は名邦事件の『団員A』が自分であることを知った。

「それで、僕は傷害罪になったの？」

「事件後あなたは意識不明だったので、取調べは快

復してからということになったの。意識が戻るまでに二年近く、それから記憶がない状態のまま入院が続いていたので、取調べは始まらなかつたわ。病室での取り調べもあつたけど、あなたは何も覚えていなかったの、事件の様子は、喧嘩のときにまわりにはいた人たちの証言だけで固められていったの。喧嘩の時点では責任能力があつたとして、あなたは病室のまま有罪になつたけど、執行猶予がついたの。

あなたは学校を辞めて治療に専念したの。退院したときは執行猶予中だったけど、その状態でも構わないからと言って社長さんはあなたを雇ってくださったの。それからあなたが今の立場で仕事できるようになったのは、あなた自身の努力よ。だからリスクがあるのにあなたを雇ってくれた社長さんも、大変喜んでくださっているというわけ」

僕は言葉が出なかつた。インターネットで調べた

ばかりの前代未聞の楽器による暴行傷害の犯人が、まさか自分だとは信じられないようなことだ。母親に切々と話されても、僕にはまったく記憶は蘇ってこなかった。

「オーケストラで僕はチェロの何番目に座っていたのか知らない？」

「知らないわ。まだ入ったばかりで演奏会もなかったし。でも中学から習っていた子なんてそういない

でしようから、案外前の方だったのかもしれないわね」

「二番目とか？」

「だから、知らないって」

ささゆりはあの写真で、チェロの二番目に座っている人物が、娘の父親だと思っている。僕がもし二番目に座っていたら、僕がささゆりの娘望の父親と

いうことになる。それもハチャメチャなコンパの行
きずりの行為で出来た子である。さすがにそんなこ
とについては母に聞けない。ささゆりが二番目とい
うからには、写真をささゆりに渡した者が、ささゆ
りの相手が二番目に写っていると教えたに違いない。
大学に入って直ぐのささゆりも相当大胆なあばずれ
娘だが、妊娠させた二番目の男も無責任なことをす
るものだと思った。

会社で出会ったささゆりは、天使のように清らかな、見たことも無いほど美しい女性だった。いまもその思いは変わっていない。

そこで僕は、ささゆりがわざわざ僕を夕食に招待して、当の娘のいる前であのような話を切り出したのは、二番目の男が僕だという確信があったからではないだろうかという気がしてきた。あるいはそうでないとしたら、二番目の男は娘の父親だが、僕は

二番目の男をチエロで殴り重傷を負わせた方だとい
うこともあり得る。ささゆりは聖女のような顔をし
て、娘といっしよに僕に復讐しようとしているのか
もしれない。

いずれにしても、ささゆりは僕が関係者の一人で
あることは、何らかの理由で知っているのだ。僕は、
もう一度ささゆりに会って、自分が知ったことを全
て打ち明けて、彼女の考えていることを確かめたい

と思つた。

僕はささゆりに長いメールを書いた。ささゆりからは、正月休みで僕が名古屋にいる間にいつでもいいから来て欲しいと返事が来た。僕は、三十一日の午後一番で訪ねることにした。新年をもやもやしたまままで迎えたくない気持ちもあつた。

「いろいろ調べてくださつてありがとうございます。

藤田さんは二番目に座っている人です。つまりあなた
が娘の父親です」

ささゆりはそう断言した。そのとき娘の望は友達と
何処かに遊びに行っているとのことで留守だった。

「間違いないのですか？僕には、お話したとおり記
憶がないのですが、やはり僕だったのですか？」

「間違いないと思います。コンパでお互いに勢いで
ああなつてしまいました。たしかお名前もお聞き

していなかっただし・・・お聞きしたかもしれませんが忘れてしまったのかもかもしれません。私は、オーケストラとは関係なかつたので、あなたの楽器さえ知らなかつたのです。あの写真は事件よりあとになつて、オーケストラに知り合いがいるという友達がくれたものです。

勿論事件のことは知っています。学校中が大騒ぎになりましたから。そのためにオーケストラ部は廃

部になりました。十年くらい経ってから復活しましたのでいまはまた活動してはいますがね。私はまさかあなたがあの事件に関係しているなんて想像もしませんでした。その友達が写真の二番目の人がコンパのときに私とイチャイチャしていたイケ面君だと人伝に聞いたようです。しかしその友達も写真のイケ面君が名邦事件と関係あるかどうかは知らなかつたようです。私は一生懸命その写真からあなたの姿

を確かめようと思いました。あれでは無理ですよ。友達に、私がオーケストラの誰と関係して妊娠したかは知らなかったはずですよ。

私は今の会社に入社して、あなたが名邦大学出の藤田さんということを知ったのです。でも、会社で藤田さんのお顔を拝見したときも、コンパのときの相手だということとは思いません。あんなことがあったのにすみません。もちろん大学では

その後もお会いしたいと思つていましたが、オーケストラは廃部になつてしまふし、キャンパスで偶然出会わないかといつても注意していましたが、マンモス大学だったし、出会うことはありませんでした。入院して、しかも退学されていたのでは出会うはずありませんね」

「でもその話ではまだ僕が娘さんの父親かどうかは確定しませんよね」

「私は、その頃までは半分不良みたいにしていましたが、その後は心を入れ替えて、すっかり真面目にしていますから。娘の母親としても責任がありますしね。信じてくださらないかもしれませんが、私、あんなことしたの後も先にもあの時一回だけなんです」

「いや、そういう意味ではなくて、チェロの二番目の男が僕ということがどうして特定できるのです

か？だいたい僕がチェロを弾いていたかもご存じなかったのではしょ」

「大丈夫です。以前藤田さんがまだ本社にいらつしやつたとき、商品説明会の資料作成の手伝いをしていただいたことがありましたね。あのとき私、あなたのすぐそばで作業したでしょ。そのときあなたの襟に隠れる辺りに二センチくらいの赤い痣があるのを見たのです。その瞬間、あの夜のこと蘇つたの

です。同じ痣だと思ったのです」

「そのときは何も言われなかつたですね」

「ええ、見たことのある痣だと思いましたが、確かにあのときの相手だという確信はありませんでしたから。もう少しきちんと確かめたかつたのです。そのうちあなたは東京に転勤されるし、私のほうも新たな情報を得られないまま時間が過ぎてしまいました。でもずっと気にしていました。美術館で偶然お

会いしたのが、運命的な幸運だったと思います。それで先日食事にお誘いしたのです」

「わかったのはよかったけど、わかってみるとその相手は暴行傷害犯だったというわけですね」

「そんな言い方しないでください。その人は罪の重さを感じて直ぐに自らの命を絶とうとされたじゃないですか。それに会社での評判からもあなたが娘の父親でよかったと思っっています。私の両親も、よく

確かめたら私の思うようにしていいと言ってくれて
います」

「それで、これからどうなるのですか？」

「わかりません。あなたはまだ執行猶予中なのです
か」

「いえ、いまは何もついてないはずです。暴行傷害
の前科はついているそうですけど」

「突然ですが、私と一緒になることは出来ません

か？」

「結婚ということですか？」

「やっぱり、だめですか？結婚されていらないことは知っているつもりですが、どなたかお付き合いされている方とかあるのですか？」

あまりにも突然の、あまりにも直接的な申し出に僕は衝撃を受けてしまった。見たこともないような美しい女性だと思って憧れてきた人であり、一昨日

の食事への招待も、心の底では近づきになることを期待したが、いきなり結婚をしないかと言われて言葉を失ってしまったのだ。すぐに返事しないことで、僕が彼女との結婚に否定的だと思われたくない。僕はどう言えばいいのか焦った。そのとき僕の心の底に、別の感情が蠢いた。あのような事件を起こした僕が、憧れの女性と幸せに結婚してもいいのだろうかということだ。それにささゆりは、娘は僕との子

だと言っているが、その娘の気持ちはどうなのだろうか。十四歳という和多感な年頃だ。先日の食事の時には、母親とまるで友達同士のようになつて話しに加わっていた。そういつた表面上の言動と、内心とが一致しているとは限らない。

「望さんの父親が、傷害事件で有罪になつた張本人でも構わないのですか？」

「それを知つた上でのことです。それよりも娘の本

当の父親であることの方が大事ですから」

「娘さんの気持ちは確かめられたのですか？」

「もちろんです。これまでに何度も娘から、自分の父親はどうしたのかと聞かれました。そのたびに事故で行方がわからないと誤魔化してきましたが、このたびあなたとお話しする決心をしてから、彼女の出生のいきさつと、あなたと連絡が取れなくなっていること、今回少しずつ手がかりがわかってきたこ

となどを話しました。そして、藤田さんが本当に父親であることがはっきりしたら、私はあなたさえよければ、できることなら結婚したいと思っ
ていることも話しました」

「娘さんは、何と？」

「DNA鑑定でもして間違いなかったら、本気で考えてもいいって。それよりも『あのひと、良い人みたいんだけどお母さん本当に結婚したいほど好きな

の？』って聞かれました。『もちろんよ』って答えました」

このときささゆりは微かに頬を赤らめたように見えた。

「僕にとっては夢のように嬉しい言葉ですが、たしかにDNA鑑定はしたほうがいいかもしれませんね。僕自身の気持は、そんなこととは無関係にあなたと結婚できることは嬉しいのですが、娘さんの気持ち

もありませんし、僕の記憶喪失や、あなたの思い違いも絶対にならないとは言い切れないでしょ」

ささゆりはしばらく考えていたが、サツと立ってリビングの壁際にある机にあるパソコンに向かった。電源を入れてパソコンが立ち上がるのを待ちながら、DNA鑑定ってどうやったら出来るのか調べてみるという。その間に僕はもう一つ気になっていたことを言った。

「結論を出す前に、もう一つ調べたいことがあります。僕が重傷を追わせた相手の人が、いまどうしているか知りたいのです」

「連絡が取れるのですか？」

「僕の親が知っているかもしれません」

「そうですね。案外近くで暮らしておられるかもし
れませんか。名邦大学だったわけだし」

ささゆりは、パソコンに向かってキーをたたき出

した。ブライインドタッチで手さばきは鮮やかである。
「ありました。父親、母親、子供の参加の場合は簡単に出来そうですよ。費用も三、四万だつて」

「病院か何処かに行くのですか？」

「DNA鑑定センターというNPO法人があるらしいわ。一週間から三週間くらいで結果がわかるらしい」

「では、それはそれで考えるところとして、僕は怪我をさ

せた相手の人のことを調べてみます」

「それよりもあなたのご両親が、不良みたいに子を生んでしまった私との結婚なんて認めてくださるか
どうかもわかりませんわね」

「それは、僕も同罪なのですから。親の賛成反対は
関係ありませんよ」

「でも、できれば祝福されたいですよね」

僕はささゆりと話したことを、彼女の中学生になる娘が僕の子供であるらしいことも含めて全て両親に話し、何も問題なかったら彼女と結婚したいという僕の正直な気持ちも話した。両親ははじめこの話を聞いて驚いたようだが、息子が突然自殺を計るところに比べたら、大きな驚きではなかったようだ。父も母も基本的には僕の考えを認めてくれた。それどころか、本当に娘が僕の子供だったら、自分達の孫

でもあるのだから、むしろ必ずそうしななければなら
ないとも言った。ただ僕の激しく衝動に動かされる
暴力的な性格が本当に消えてなくなっているかが心
配だと言った。また大学に入ったばかりで同学年の
男と関係して、出来た子を産んで育てるといふ相手
がどんな女性なのかも気にしているようだった。さ
さゆりの育った家庭のこととも知りたがった。そうい
えば、僕も彼女の親のことはまだなにも知らなかつ

た。

僕が怪我をさせた相手のことは、両親はよく知っていた。彼は意識不明の重態からは脱したが、左耳の聴覚を失い、左目の視力も失った。また顔面の左側にはこめかみから頬にかけて大きな傷跡が残っているそうだ。

傷害事件となつて、僕が有罪判決を受けたため示談といつた流れにはならなかつたが、両親は相手に

対して相当の謝罪金を払い、彼の治療にかかる費用は生涯負担することを約束したのだそうだ。現在彼は両親と共に岐阜に住んでいて、近くの人に勤めているが、まだ結婚はしていないらしい。

相手の親も、僕が自殺を計かり二年も意識が戻らなかつたり、記憶喪失が残つたりしたことを知っていて、あまり僕を責めるようなことは言っていないそうだ。僕が母に、自分が結婚する前に直接僕から

彼を訪ねて謝罪したいと言うと、母は

「それはどうかね」

と言った。母のその言葉から僕は、やはり相手は僕
によい感情は持っていないらしいと感じた。当然で
ある。僕が死なせてしまったと思つて自殺しようが
どうしようがたかが喧嘩で、普通では信じられない
ような凶暴な暴力を働いて不遇者にしてしまったの
だから、激しく憎んでいても当たり前である。そん

なところに、

「ご機嫌如何ですか。僕結婚します」

などと言いに行くのはおかしい。母の言うとおりで。では、結婚することは言わずに、兎に角一度謝罪するのはどうだろうか。それならいいだろうということになった。両親と三人で行くという案も出たが、大げさすぎるのもよくないということ、結局僕と母の二人で行くことにした。事前に相手の都合を聞

くと、電話のときに辞退されてしまったりすることもあるのです、正月明けにアポ無しで訪問することになった。

一月三日の昼前、相手の家では本人を含めて家族が揃っていた。僕は内心門前払いも覚悟していたが、そんなことはなかった。来意を告げると奥さんが笑顔で応接室に招き入れてくれた。母と二人で待つて

いると、彼が両親と共に現れた。彼は僕を見ると、

「おうっ」

と言うように手を上げた。僕と母は立ち上がって丁寧にお辞儀をした。手を上げて挨拶されても、僕には彼の記憶は無かった。もちろんその目的で来たのだから相手が誰であるかはわかっていたが、やはり僕の記憶はまったく消えたままなのだ。母が、僕の記憶がないことを言つて、何となく他人行儀にして

いる僕の態度の釈明をした。彼の左耳と左目は潰れたようになっており、左頬の傷跡も痛々しい。僕と母はあらためて立ち上がって、丁重な詫びの言葉を言いながら、深く頭を下げた。

「いやいや、もうそんなことはいいですからどうぞお掛けください」

と彼の父親が言ったので、僕は少し気が楽になった。「藤田君、元気になってがんばっているそうじゃな

いですか」

彼が言った。僕は彼と昔話するような情報が頭の中に何も無い悔しさを噛み締めながら、

「ありがとうございます」

としか言えなかった。

「まあ、藤田君も悟も昔のことは水に流して、これからの長い人生を生きていくことに精を出すとい
い」

「ありがとうございます」

僕は少し気が楽になつて、結婚することになりそうだと言いかけたが止めた。悟と呼ばれた彼は僕の一年上と言うから、当然結婚のことも無関係でない年齢だ。しかし、もしかしたら僕が与えてしまった傷のために、思うように恋愛も出来ないかもしれない。

「実は悟、この春結婚することになったのですよ。」

相手の方は、あのオーケストラの一年後輩なんです。だからあなたの学年ね。同じチェロに山田さんっておっしやる素敵なお嬢さん、ご存知でしょ」

そこまで言つて、悟の母親はハツとしたように言葉を切つた。

「息子は、社会復帰後の生活はちゃんとしているのですが、あの頃以前の記憶だけが抜け落ちているので、すみません」

と僕の母は、先ほどと同じ釈明をした。

結局僕たちは結婚の話はしないまま辞去し、帰りに姉の嫁ぎ先に寄って昼食を共にした。中学生を頭に三人の子供と姉夫婦の揃った賑やかな昼食だった。そこでは僕が結婚するかも知れないということが話題の中心になった。その中で姉達の結婚式で僕がチエロを弾いた話が出た。そこで僕が下手なチエロを

長々と弾くのを出席者達みんなが辛抱強く我慢して
いたと言つてみんなで笑い転げたが、僕にはまつた
く他人ごとのように思えた。

真剣な話もあつた。

「滋、もう乱暴するようなこと全然ないの？結婚と
なるとそれも心配だよね」
姉の言葉に母が答えた。

「退院後今まで十年以上になるけど、そんなこと一

度もなかつたらしいの」

「滋はどうなの。仕事でプレッシャーやストレスもあるでしょうけど、昔みたいにコントロールできなくなるようなことないの？」

「昔どうだったか知らないけど、会社ではお客に何言われても我慢強くて穏やかだつて言われてるよ」

「そんなら大丈夫ね。それにしても大学に入ったばかりで名前も知らないような女の子を妊娠させるな

んで、とんでもない不良だったのね。でもいまその責任を取れるんだったら、幸運っていえるのかもね。もしその話が間違いないのだったら、お母さん『おばあちゃん』っていうこと?」

「実感無いわね」

母はそう言って笑った。

こうして僕とささゆりの結婚はだんだん現実味を

帯びてきた。

やがて三人で試料を提出したDNA鑑定の結果がセンターから届いた。報告書には、提出された試料により慎重に検査した結果、三人が親子である確立は九九・九九パーセントであるとあつた。

僕のささゆりへの最初の憧れは夢のように淡くロマンティックなものだったが、十年経ってからやつ

てきた結婚へのアプローチは家庭裁判所の裁定か何かのように事務的で、まるでロマンティックではないように思えた。それでも僕がいまもささゆりに憧れの気持ちを持っているのは紛れもない事実で、それはすでに愛に変わり始めている。そしてわが子だという望に対する感情もだんだん自分の娘という気持ちを持ちが持てるようになってきている。

こうして結婚した僕とささゆりは、東京に住むことになった。ささゆりは会社を辞め、望は転校した。ささゆりは藤田康子になったので、もう暗号の必要はなくなった。

(了)

編者あとがき

著しくIT技術の発達した今日、かつて発表の機会に恵まれなかった無名アマチュア作家に大きなチャンスが到来しました。昨年末のAmazonのペーパーバック進出はさらに力強い追い風となっています。

故山中與隆は、定年後すぐに退職し、アマチュア

としてチェロを弾いて室内楽を好きなだけ楽しみな
がら第二の人生を過ごしておりましたが、それと同
時に、作家になることを目指して文筆を続けると宣
言し、毎年のように懸賞に応募していたようです。
それは近年まで続けられていたことがパソコンの中
身から分かりました。傍におります妻の私は、とう
に文筆を止めてしまっていると思っておりますの
で、それを知って愕然としました。

ここに、山中與隆が書き残しましたものを順次発表していこうと決心しました。なんらかのきっかけで本作品をお手にとって頂けたご縁を嬉しく思います。今後発表する作品にもご期待下さい。

またブログ ([URL:https://www.duoyamanka.com](https://www.duoyamanka.com))
への投稿の形でも発表していきたいと考えております

すので、あたたかく見守っていただければ幸いです。

二〇二二年四月

山中伶子

※1 山中與隆（やまなかともたか）の名前についで

與隆の「與」の字は「与」の旧漢字です。従って、入力時に「よ」で変換をかけると、下位ではありませんが、表示されません。

著者紹介

山中與隆（やまなかともたか）

一九三九年～二〇二一年

「名古屋生まれ、広島大学卒。小学校の教員暦七年、その後一般のサラリーマンを三〇数年。いまはリタイアして悠々自適の生活を享受中。大学時代に始め

た弦楽器（初めはヴィオラ、その後チェロ）を今も
続けている一方、小説や随筆の執筆にも力を入れた
いと思つています。

書くものとしては文学的なものから推理もの、歴
史もの、恋愛もの、ファンタジー、社会派的なもの
などジャンルを選びませんが、常にベースには何ら
かの形で音楽が絡んだものにしたたいと考えています。
ライフワークとしたい目標は、音楽を前面に出し

たもので読者の方々に小説としての読み応えと、そこに登場する音楽を是非聴きたいと思ってもらえるような、しかも私の著述によつてその物語にも音楽にも感動してもらえらるような作品を完成させたいと思つています。」

著者プロフィール(二〇一〇年五月)より

今後の出版予定作品

今後は、既刊の電子書籍のペーパーバック版を出版の予定です。

既刊作品

|| 電子書籍 ||

『都志見往来日記』 異聞

コンサートは開かれた

さまよえる視察団

蒸発の衝動

インテルメッツォ

爆発

妻が消えた

既刊の短編

アマールスを聞く男

オセロー

テンペスト

定年の晩

魂の三重奏

ロシアンルーレット

ささゆり

才能移転

ある三文作家が見たもの

けんか

袖ふれあうも

ミスターフエイト

峠を越えて嫁入りした女

花火見物

ある小学校教師の敗北

三坂峠 二話

第一話 《お蓮・勘兵衛 悲恋の墓》

第二話 《緑のトンネルで》

阿弥陀山

ゴーシユの華麗なる転身

ある男の臨終

野の寂しさ

四重奏

親も子も老いて

わしや、ただの山ザルじや

リヨウコからの電話

カルテットのあゝ風景

「オセロ」の手紙版

出来る間に、出来るだけ

なぜ？

紀行文

広島百山と吉和冠山登山

ひとり、山を歩く

短編シリーズ String Fiction Series

1 弦楽四重奏団 a

2 弦楽四重奏団 b

3 親和力

- 4 トリオ・ソナタ
- 5 不協和音
- 6 解散
- 7 音楽のある生活
- 8 ビオラを弾く生活
- 9 疑問
- 10 生きがい
- 11 激情

12 カルテット

最終三作品

裸の王様は何処へ行く

むかし俺がクマだったころ

ある兵士の物語

Ⅱ既刊のペーパーバックⅡ

『都志見往来日記』異聞

コンサートは開かれた

さまよえる視察団

短編集テンペスト他

短編集2―ある三文作家がみたもの他

短篇集3―ミスターフェイトほか

ささゆり

2022年6月30日 初版発行

著者 山中與隆

編集発行 山中伶子

表紙素材元 photoAC

ユリ

作者: 花散歩

©Tomotaka Yamanaka

<https://www.duoyamanka.com>
